



Title	中井木菟麿翁の業歴：舊教聖書及び正教聖典の翻譯に獻身盡力
Author(s)	羽倉，敬尚
Citation	懷徳. 1974, 44, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90515
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中井木菟磨翁の業歴

——舊教聖書及び正教聖典の翻譯に獻身盡力——

羽 倉 敬 尚



翁は大阪の名校、懷德書院最後の學校預り人兼教授の中井及泉號桐園通稱修二の男にて、母は同校最後の學主格教授の並河華翁（學校名學主の中井竹山の外孫、初名朋來、通稱復一、初號寒泉、明治後の戸籍制定後は華翁の名を用う、贈正五位）の女、霜女で安政二年六月十二日、大阪船場、尼崎町壹丁目（現在の今橋通四丁目北側、日本生命保險相互會社本館位置の地）學校内で生れた。以下、つぐ丸の用字を併用する。

翁の父桐園は學校學主、碩果（竹山の末子、天保十一年終る七十歳）の養子で、實は竹山の弟で別家した履軒の男、柚園（天保五年父履軒に先んず、年四十歳）の子であるが、本系の碩果に嗣子がなかったため、別家を廢して碩果の養子となった。即ち兄竹山、弟履軒で二家に別れた中井家が桐園によって一家に歸一したのである。この桐園が入嗣前に一時、前記の並河華翁が碩果の養子となった。又、履軒は別家して和泉町に水哉（サイ）館を建て教授したが、文化元年、兄竹山没後は懷德書院に移って兄の遺業を繼いでゐる。

明治二年、新政の學制改變に依り、享保以降、百四十年餘、世々中井家が師儒に任じた書院は閉校廢學となり、華

翁は桐園と共に校門を開ち、その敷地建物、家財を處分賣却して一旦、本庄村（現大淀區）に移り、微々乍ら二人各々家塾を開いて、書院時代の遺弟中、希望し來って請う者に教えた。

この時代の前後、二人の身邊には不幸にも凶事が相次いで起った、即ち慶応三年六月、華翁の妻歌女（中井碩果女）が六十一歳で、夫に先立ち、次いで明治元年七月十九日、華翁の男尚一（號簞〔タン〕街）好學明敏で父の教講を助けたのが廿歳で先んじ、更に同月廿五日には桐園の妻、霜女（華翁女で木菟鷹及び妹、蘭女〔安政四年生れ〕の母）が三十九歳で終った。翌二年十一月、桐園は西成郡加島村の醫、小笠原孝次郎の次女しゅんを後妻に迎えた、これが終子の母で、明治拾年三月生れである。思うにこれらは世故の激變、特に廢校による身近な家政の頓挫による衝擊がその一因であつたろう。華翁はこの翌年即ち明治三年三月、末女、閏（うる）菊（未婚）に守られ南江戸堀二丁目住の女婿で、もと九州筑後柳川藩主立花氏の藩醫、淡輪（タンナワ）三郎輻方に移り、居ること四年、同七年、うる菊と共に櫻ノ宮に寓居したが、十一年再び二人は淡輪に迎えられ、翌十二年二月六日、八十三歳で終った。遺孤女うる菊は遂にこの老父に一生を捧げて養護に盡し嫁がなかったが、よく庭訓を受け譽止端正で、父歿後、櫻ノ宮、大阪造幣局岡本局長に招かれ、その信賴を博し、同局の家政教師となり、同局職員、女子工員の愛敬を博し、十年近く在職し、同廿一年一月、惜まれる中、四十六歳で終った。この美事の昔語は嘗て筆者、大阪に於てこの孝女の教えを受けた老女性に聞いた一斑である。並河華翁は書院最後の教育文功者として、大正八年十一月、贈正五位の榮譽に浴した。この表賞については府當局の依頼で、女増であり受業でもある中井木菟丸が傳記事略を作つて提出したのである。華翁は故儒、明治十二年、物故であるが、寫像を貽しておらず、幸い木菟丸はその風貌をよく知つておつたから、丹精の好者、故早川自照翁筆にて半身像の筆勞を煩し、筆者贊詠を記し表装して、懷德堂記念會に寄納しておいた。實は筆者は、華翁家の本宗、京の儒醫並河家（天民・誠所の出自家）に深縁の身、華翁嗣なくせめて奉養の一助を致したのである。なお、大阪上本町、華翁の墓側には男タン街、女うる菊が葬られてあつて、その位置は、幸いつぐ丸が記憶しておつ

たから、本宗故並河誠三郎（三重縣衛生技師、醫博）とはかつて小石標を造立しておいた、それは拙筆で表し、うる菊に孝女を冠しておいた。この孝女は小照をツグ丸から贈ってきたから曾て本誌にのせた。ツグ丸の父、桐園は、明治六年、本庄から江南小學校教員を拜命し、後、江戸堀南通に自ら好徳學院を開き同十四年一月、五十九歳で終った。

冗長な前書をこの邊に止めてツグ丸に及ぶが、維新後、國禁解かれて、歐米宗教漸入し明治八年頃、帝政露國の正教會（カトリック）のエウヒミイ修道司祭が來阪して、川口の外人居留地を本據とし同十一年、淀屋橋東附近に精々舎という正教講義所を開設し、屢々布教講説があつた由、ここでは、五十四名の洗禮者が出來て、教勢が追々進展した。ツグ丸がこの新外教に觸れたのは恐らく、この頃の様で孫引き乍ら大阪ハリスト正教會小史によると、明治十二年の公會で、ツグ鷹が副傳々教者に任命されておる。それから約十年後、同廿二年に、ロシア語讀みの送り假名をつけた「訓點新約聖書」が、ニコライ師とツグ丸共編發行したとの記録が見られるのである。（神戸市生田區山本通ハリスト正教會司祭の牛丸康夫氏發行の「曙光」第四三號）

以上の如く正教信仰を身につけると共に、この道の教典、聖書の翻譯にたづさわつたツグ丸は恐らく、更にこの翻譯という至難な業務に力を致さんの堅き目標に到達したのであろう、既に兩親も亡き身遂に志を決し同廿一年三十四歳、二妹蘭三十二歳、終子十二歳と共に家祖以來の郷地大阪を去って東上した。この際、自家傳藏の書院遺書は、その殆んどを亡母並河氏霜女の妹、豐女の嫁ぎ先、奈良縣生駒の淡輪氏に預託した。次いで同廿四年、落成の神田駿河臺教會堂にて、來朝のニコライ師の十哲の一として、爾後、三十年近く聖書、聖經の翻譯及びそれらの參考字書の出版に、獻身従事し、何れも大成に至らしめたのである。その間のツグ鷹精勵の一端が、明治三四年七月發行の「正教新報」四九四號に「正教譯の新約聖書刊行」のテーマで發表されておるのが、前記と同じく「曙光」に抜抄掲載されておる。二重の孫引きであるが、門外の筆者、了解の限度を左に援引する（多少意譯を加えた）

當時、主教ニコライ大師父の日々の執務は、正教學校の生徒と同じ課業時間によられ、長年月の、ツグ鷹と机を並

べて毎朝七時半にホン譯業務を初められ、正午に至るまで約四時間、唯一回暫時休憩せられるだけで、午後も同様、續行、夜は食後六時から必らず九時まで續けられた云々

また、これはギリシャ語の原書及びスラブ語、ロシア語の聖書の原書を譯するのであって、これには英譯聖書と聖師父の聖書注釋の二種本を參考とした、その間、ツグ磨は譯に使用の熟字、用文の文法上の誤りなき様、萬全を期し、大槻氏の「言海」落合氏の「言葉の泉」等を參考にして嚴密な考勘に當った

また、このホン譯はギリシャ語原書を最も忠實正確に譯したもので、爾後の新教派の英譯、舊教派のラテン譯等は二重譯でもあり、或いは非難を受けるだろうが、この正教會の譯書は最も著明な教書として採用されたのであろう。右の文中の大師父は、大正元年二月十六日、東京聖路加病院にて永眠するが、その入院中もホン譯に従い、腑に落ちぬ事があると他人を煩さず、集めておいて適時、ツグ磨の來院を請うて最後の決を下したといった如く、老宗教人の熱誠と更に、そのツグ丸に寄せた信頼の厚かつた事及び更にツグ磨の誠實で寡黙、唯々マジメに負托に應えたことが知られるのである、ツグ丸は、この間、教會經營の女子神學校に教鞭をとり、國漢學を教授しておる。この少し前頃、ロシア帝政國は革命政變で、社會情勢變化し、ツグ磨も追々老に至るの時、偶々大阪に祖先代々師儒であつて明治二年閉校後、殆んど忘れられておつた懷德堂再建の議が、在阪識者有志により發議せられ大正二年、學堂再興記念會が結成せられ、次いで同五年、同會館が重建された。幸い、在京間のホン譯の大業も一段落の成果に達したので、遂に惜まれ乍ら別れを告げて、兄妹三人は大正九年十月、東京を引上げ西下し、初め兵庫縣下川邊郡川西村小戸行人塚に同十四年四月、大阪府豊中市に移った、豊中では舊教の梅花女學校（同十一年專門校に昇格）に妹、終子と共に教鞭をとり國漢學を教えた。その傍ら前記の祖先師儒の懷德堂再興の議にも、師儒の裔孫として參畫し、新學堂の會館及び石造書庫の完成するや、傳家の書院師儒三宅、五井及び自家中井歷代の著書原本、記錄、及び扁額等關係物件の大半を擧げて、これを學堂再興記念會に寄納し永傳を期した。時恰かも戰況は追々進展擴大し、大阪附近は罹災の杞憂

もあり、昭和十五年末頃京都市左京區吉田田中大堰町の寓居に移り（同母妹、蘭女と共に）同十八年三月廿五日、八十九歳の天壽を以て、この寓居で終った。蘭女はこれより先、昭和十六年、春、八十五歳で、兄ツグ麿に先んじ終り、一方季妹、終子は昭和十二年七月、東京在世中、兄と共に教鞭をとった東京女子神學校幹事及び教え子達の勧めにより、再び東行、横濱婦人矯風會兼婦人ホームの舎監に招かれ就職したが、約一年餘にて豊中にのこした兄の姉二人の衰老の世話の爲め退職して再び西下し兄姉を見守ったが、上記の通、戦況に鑑み京都に移り、姉、蘭、兄ツグ麿の死没に會い、これを送り、終戦を京都に迎えたが、既に單身のこと、物資入手不自由であつた處、大阪箕面在、萱野村字芝の舊家、赤穂浪士の萱野三平の遺跡、中村家當主政爲氏（大阪市園藝技師）の母堂、成子刀自が、嘗て豊中梅花女學校にて終子の教え子だった縁で、奇特にもその報恩の爲め同廿二年八月、同家に迎えられることとなつた、私も昭和廿年五月、終戦直前東京青山南町の持家（借地）を戦災にて失ひ、長男が大阪の勸銀勤務であつたので脛カジリ同居しており、數回、箕面に往訪したが、終子の爲めに廣い坐敷、次の間まで提供せられ、更に學堂遺物の若干の遺書類、特にカサ高い相當量の版木、履軒の「水哉館」の大額等、追々老朽の終子一人の世話だけでも大抵であるのに、容量ある數々の家具遺物の保管など、舊家でさぞご厄介な事だつたと思われ、お家は廣く庭園花樹もあるが、この大家坐敷に晩年約五年間殆んど安臥して（昭和廿五年十月、外出時、夕刻自轉車に衝突足不自由となる）食事共萬端の世話をいただいたご一家に、顯みて深厚の謝意を表するのである。唯この間、恐らく中村刀自の呼びかけであろうが刀自同窓の梅花女校の教え子達が機ある毎に來訪見舞われ、屢々贖金し贈られたことも忘れられず、筆者も血縁の身、時に貧燈を挑げたが、その際、書面往復した、恒石千壽様（梅花お勤め）、濱谷千代様、安井隆子様（この人の夫君義人氏は慶應大出身で偶然、私戦時中召集者主計中尉で東京陸軍造兵廠に同勤した外に少くも四、五名の方があつた。なお重要な一事は、この名家、中村成子刀自の一女、和子さん（大正八年生れ）が、母刀自の勤めで、終子の養子となつて中井家を繼がれたことである。更に終子は生前、和子入籍後別に東京ニコライ司教鵜澤師の男、泰氏を養子し入籍した、現在、千葉

縣流山市住で、東京丸ノ内の新東京ビル内、日本金屬産業本社事務員勤めである。終子は、晩年、以上の如き暖かい教え子方々の他人を超えての看取りの中に昭和卅年五月十七日、七十九歳で安らかな眠りについた。養女和子さんは、その後、中井家には男子、泰氏の養子入籍があったので、母堂成子刀自の意志もあり、同卅四年、世話する人あって吹田市岸部の舊家堀内氏（大阪市内にて永年、校長勤続）の後妻に入嫁、なお現在は新田氏に嫁いでおる由、しかし和子さんは、今も中井家の後事を思い、前養母終子の遺志を継ぎ、且つ亡母の厚志を想うて、機ある毎に中井家墓參等追慕に盡さる由（現存梅花教え子、東大阪市住高木亮子亮子刀自談）終子の許に残された學堂遺物、版木等一切は、その後、養子泰氏から、東京の舊教々會堂に納付された由、これらは終子在世中、學堂記念會の老儒吉田銳雄翁（故西村天囚翁門弟）らが、記念會に納付方考慮され、終子にも話されたことを私も仄聞したが、現在に於ては、纏まって東京正教會に納まってあらば、將來、又いつか世に出ることと思われ、その所を得たことに、意を安んずるのである。

思うに、明治維新後わが國は永年、鎖國の後を受け漸く、歐米文化移入し、一時心酔の狀を呈する如く滔々として思想面にも激變があつたが、經年の間、幾多の試鍊を経、これらが、よく融化され咀嚼されて遂に現在の奎運に逢着したのである。一面、宗教面に於ては、信教の自由化を得て、異教の導入となり、その善をとり精神面に寄與せることは明白、偉大であつて、現代、基督教の教育機關が東西各地に大を成し、永年、人材を輩出して國家に寄與しておることは測るべからずと云うても過言でなからう。

中井ツグ麿が、短軀虛弱の小身を以て、攝生長壽を保ち、壯年に至るの間、修得した和漢學を善用して、基督教原典の聖書聖典の翻譯汎行に、半生の努力を致し、後世に教旨の指針を傳えたことは、嘗て祖先が永年、累代にわたり、商都大阪で、修身齊家の實學を教え、各々家業えの精勵を勧め導いた足蹤を暗黙の中に受け繼いだものとも考えたいのである。

ツグ丸の作詩は大正年間、西下、阪神間住居のものが、當誌に隨分のせられておる。著作としては書院の碩儒五井

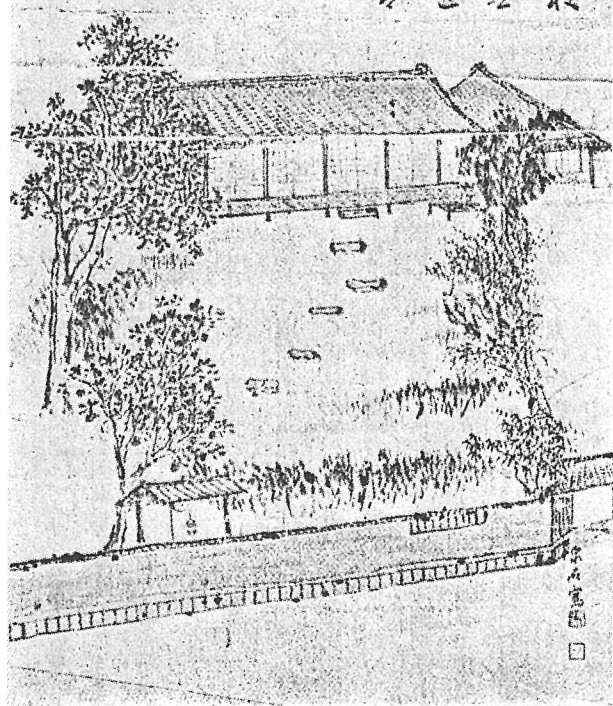
蘭洲（中井竹山、履軒兄弟の師）と共に一時書院で講説した地理學者並河誠所の傳「仰止錄」の一書が管見に入るのみである。誠所は、儒醫天民の兄、兄弟、京堀川伊藤門で、享保末年、幕命により五畿内志の勞著を完成し、晩年、伊豆（静岡縣）三島に招かれ、そこに仰止館を作り近郷人を教え、大正六年、贈從五位の恩命を受けた篤學人で、書名はこの館名によつたのである。ツグ丸はその性を表わす如く正楷書風の如き謹直で、大阪、日本生命保險相互會社に建てられた學堂舊址碑の文（作は天因西村子、今、會社本館玄關右にあり）や學堂先賢墨迹集の跋文等を書いおる。大阪京橋のニコライ教會會館ホール櫓間には半身遺影がかけられておる。ここにその一部上半をのせたのである。

ツグ丸には天生、黃裳の名號あり、次の學堂舊圖は勤めによりてツグ丸が記憶を畫人に語つて作られたもので、なお意に満たぬ處があるとツグ丸は語つておつた、この贊語は、幕末、學堂の斜陽衰頹の状を回顧して慨嘆した如き言詞が見られる。右下に入口の門あり、祖の竹山筆の「入德門」の扁額あり、右側奥は玄關にて、左數間、椽あるは講堂で、ここに初代學主の懷德堂の三字額あり、全敷地の廣さは約二百坪餘で、さほど廣くはなけれど市内としては狹小ならず、この地域内に教授、預り人の住居及び書生宿泊の寮もあったのである。（考）一四一頁に説明あり）

ツグ丸は漢詩文の外、和歌道にも參じた、これは本誌前號の「大阪の草わけ國學者、下河邊長流」を首題として、懷德堂書院の先賢の學が和漢兩道にわたることを詳述し、その中の數人の作品をあげたが、ツグ丸は、殆んど最後人として、書院なき後、さながらこの兩道を傳えた唯一人というも過言でなく、この和漢兼該の學識により、始めて聖書の翻譯も完璧なるを得たのであり、又晩年、妹終子と共に、阪神に移り來り、豐中の梅花女子専門校で國文をも教えたのである、この學の傳統は無論、中井本宗竹山の傳によるが、血統を辿れば百首贅々（ごぶ／＼）の如き和書の注釋をも傳えた高祖父からの、即ち履軒（高祖）―柚園―桐園（ツグ丸父）、更に本宗竹山の外曾孫、並河朋來（初號寒泉のち華翁、この仁も和歌を詠んだ）の訓導にも因るのである、しかしこの道のツグ丸の作品は惜しくも少い、これは純な國學者、平田篤胤が「月花をわれも哀れと見てはあれどあはれと歌う隙なかりけり」と嘆詠したのと一般で、翻譯の聖

浪華懷德舊書堂、井上交枝橘柚黃、不_レ愁飄風墜、
 情甚雨剖高牀、春過枯倒連翹架、歲暮傷萎
 薜荔牆、鳥々何堪語、三已有_一、荒園舉_レ鉞伐_ニ甘棠_一
 何堪語、已有_一、荒園舉_レ鉞伐_ニ甘棠_一
 陸正台園系作_レ此圖錄_ニ

黃裳隱者



浪華懷德舊書堂、井上交枝橘柚黃、不_レ愁飄風墜_ニ
 碩果、無情甚雨剖高牀、春過枯倒連翹架、歲暮傷萎
 薜荔牆、鳥々何堪語_ニ三已有_一、荒園舉_レ鉞伐_ニ甘棠_一
 憶_ニ三已有園_一舊作今作_レ圖錄_レ之

黃裳隱者

業に没頭して全く寧日寧時がなかったたのであろう。幸い一枚の短冊を搜したから次にのせる



限りなき心のたけ(丈)のこもれるは、幾重きぬの衣の下にこそ知れ 嗣満(つぐまろ)

たけ(衣)は下の衣、衣類のたけの、かけ言葉であり、横丸のたけのこの文字の使い方は、古い古今集以来の「物の名」の一詠法によったのである。

これは私が明治四十三年から大正二年まで、足かけ三年、正味一年九月間、東京の陸軍經理學校へ修學差遣で、その休日外出の際、京都ルスの母(ツグ丸とは従兄妹の間柄)の意を受け、神田、東紅梅町、ニコライ教會會宅にツグ丸兄妹を訪ねたので、京都、母から名産筍一籠を贈った時の禮歌である、當年を回顧して感慨無量である。

附記 天生つぐ丸の作文したものの管見にあるもの少いと言ったが、それはその通りであるが燈台もと暗して、余の祖父、立齊並河尙教、明治廿六年十一月二日八十二で卒すの墓、京都、東山區馬町ノ東、歌ノ中山の先塋にあり、この墓は、大正十三年十月、尙教の男、總次郎の晩年に建てたもので、立齊並河先生の表題は同町住で教掖を受けた後年の畫聖、鐵齋富岡百鍊の書、文は男、總次郎識し建つと石刻されておるが、實はつぐ丸の識作である、文が長いから省略するが、終りの銘作だけを國譯して次に記しておく。
堯舜文武ノ道ヲ樂ミ、稷契周呂ノ業ヲ講ズ、天民先生(先祖、名亮)ノ超識、水涌キテ山立ち、君子ノ澤五世、黃髮ヲ去ラズ
(昔の茶筌ぢやんヲ一生結ンダ)、肅タル貌、先人ニ方弗タリ、億百世ノ孫子、尙ホ乃祖ノ遺範ヲ繼ガン
まことに作者その人を得た思ひがせられる。

(立齊孫羽倉追記)

